

書評

レイノルズ 著 『アメリカー自由の帝国』

島田 洋一（福井県立大学教授）

本書はイギリスの著名な史家によるアメリカの通史である。著者デヴィッド・レイノルズ（1952年生まれ）は英ケンブリッジ大学で長年米国史を講じてきた。原題は、David Reynolds, *America, Empire of Liberty: A New History of the United States* である。

レイノルズには他に、『ミュンヘンからパール・ハーバーへールーズベルトのアメリカと第二次世界大戦の起源』、『世界大戦から冷戦へ』、『サミットー20世紀を作った6つの会談』などの著書がある。^①

タイトルから明らかなように、いずれも日本近現代外交史にも深く関係する。興味深い資料や論点の提示が多々あり、バランスの取れた内容だが、邦訳されたものはまだない。本書を歴認研の紀要で紹介する所以である（原著は2009年刊）。

書名にある「自由の帝国」は、独立宣言の起草者にして第3代大統領でもあるトマス・ジェファーソンが好んで用いた言葉である。著者はここにアメリカ発展の重要な動因を見る。すなわち、西に向けたフロンティア拡大の連続の中で育まれた、自由の理念の追求と帝國的欲求の併存である。それはバイタリティの源であると同時に、矛盾や偽善も生む。

興味深い資料の一例を引いておこう。著者は1776年のアメリカ独立宣言を論じる中で、ジェファーソン（奴隷所有者だった）の原案中の一節に注意を喚起する。周知の通り、独立宣言の後半部は当時の英国王ジョージ3世の「罪状」の列挙となっている。

「英国王は、何ら悪意を示したことの無い遠方に暮らす人々の聖なる自由権を侵し、捕まえた上、別の半球に連れてきて奴隷とした。あるいはその途上で惨めな死に陥れた。…あまつさえ、今やその奴隷たちに武器を取って立ち上がるようけしかけ、王から奴隷を押しつけられた我々を殺させようとしている」。

著者は、「賢明にも大陸会議はこの無理に無理を重ねた一節全体を削除した」が、ここには「新国家の心臓ガン」となる「ジェファーソンのジレンマ」が端的に表れているという。特に英国人の著者としては、母国の名誉も絡み、ここは看過できない部分だろう。

次に、時代は飛ぶが、著者は1898年の米西戦争をアメリカとスペインの戦争ではなく、「スペイン・キューバ・アメリカ」および「スペイン・フィリピン・アメリカ」という2つの三角戦争 (triangular wars) が戦われたと捉えるのがより正確だという。すなわちアメリカは、スペイン帝国に対して自己の利益を確保するのと同時に、キューバとフィリピンの独立運動にも対峙した。

そしてフィリピンでは、「よい面としては、アメリカ軍は学校や道路を造り衛生・保健システムを打ち立てたが、反抗を抑えるのに2年の月日を費やし、4000人の死者を出した。戦争と飢餓で命を落としたフィリピン人の数は最大25万人に上る。フィリピンは1946年までアメリカの保護国だった」と記している。そのフィリピンでは、韓国における反日歴史運動のような執拗な反米歴史戦は展開されない。比較政治論の重要テーマだろう。

第一次大戦後の移民制限に関する記述も興味深い。日本では、「排日移民法」に当然ながら焦点が当てられてきたが、著者は、アングロ・サクソンの優位確保を視野に入れた「現有比率に基づく移民割当制」の方が、より社会的インパクトが大きかったという。

この割当手法は、「後から米国への移民を始めたグループ、すなわちイタリア、ロシア、バルカン半島出身者を不利な地位に陥らせるもの」であった。アメリカにおける移民問題は、現在も様々に尖鋭な対立を惹起しているが、複雑に入り組んだ歴史があることを常に念頭に置きたい。

移民に対する差別的扱いと言え、第二次大戦中の日系人強制収容ももちろん見逃せない。

著者は、西海岸に対する日本の攻撃が迫っており日系アメリカ人が内部攪乱の役割を担うといった流言飛語にパニックとなり、約12万人の日系人を大統領令によってアリゾナ州、ユタ州など内陸部の僻地に強制移住させた行為を「人種差別の根深い歴史の反映」とし、「ドイツにおけるユダヤ人の扱いと憂鬱な類似がある」と嘆いた当時の最高裁判事の1人のコメントを引いている。

一方東海岸では、警戒感の緩さが問題だった。米海軍による民間船舶の護衛システムや海岸地域での灯火管制の導入が遅れ、「ドイツ軍のUボートは、鮮やかに灯火に浮かぶ目標—その多くは死活的に重要な石油タンカーだった—に狙いを付けられた。1942年の最初の7か月間に300万トンの連合国の船舶が沈められた」。

いわば西海岸方面のデマに注意を奪われ、「真の敵」であるドイツ潜水艦に備えた東海岸の守りがおろそかになったわけである。

しかし結局アメリカは、連合国に勝利を引き寄せる主役となった。「参戦国の中で、アメリカは銃とバターの両方を持った唯一の国であった。兵器の猛烈な生産と同時に、民生品もそれ以上に生産した」。

本書を通じて著者は、アメリカの自由と民主主義を基軸とするバイタリティと、人種差別に象徴される内部矛盾を、当事者の証言を豊富に引用しつつバランスよく描いている。英国史家ならではの視角からの指摘も多い。

もちろんヤルタ会談に関する記述がないこと（著者の別書『サミット』では詳しく取り上げている）、満州事変以来の日米・米中関係に関しても殆ど触れられていないことなど、注文を言い出せばきりが無い。ともあれ、通史として優れた一書だと思う。

注

- ① 原題は順に、From Munich to Pearl Harbor: Roosevelt's America and the Origins of the Second World War (2001), From World War to Cold War: Churchill, Roosevelt, and the International History of the 1940s (2006), Summits: Six Meetings That Shaped the Twentieth Century (2007).